今から２６年前，私は教員でありながらイギリスに留学する機会に恵まれました。英語の教育法について半年間学ぶことができたのは本当に幸運だったと思います。そこで身につけたものは，その後の私の教員人生のバックボーン（考え方の拠り所）になっていることは間違いありません。そこで今日は，その留学期間に私が経験した，英語教育法以外で感銘を受けたたくさんの出来事の一つから話を始めたいと思います。

留学先の大学からは留学前に，「期間中，小学校を訪問することが数回あるので，小学生とともに活動できる，何かご自身にできる得意なことを準備しておいてください」と言われていたのです。私は学生時代，一応サッカー部に所属し人並みよりはサッカーはできると思っていたので，イギリスで人気のスポーツを通して、子どもたちと一緒にボールを追いかければ，良い国際交流ができるだろうと安易に考えていました。ですので，小学校訪問直前，現地の大学の先生から「大倉さんは何をする予定ですか？」と聞かれたときも，予定通り「子どもたちと一緒にサッカーをしようと思います」と答えたのです。それを聞いた先生はしばし無言になり，ぽつりと一言，申し訳なさそうに「サッカーですか....。何か他にできることはありませんか？　剣道とか柔道とか...」とおっしゃったのです。その瞬間私は顔から火が出るほど恥ずかしいことに気付いたのです。「そうか。プレミアリーグが存在するサッカー発祥の国の子どもたちが，まだプロ化して間もない国の一学校教師とサッカーをしても何も面白くないはずだよな」と悟ったわけです。

この状況を救ってくれたのが何だと思いますか。Calligraphy です。そうです。書道です。何かあったときのためにと，渡航前，書道の先生がくださった書道道具一式を持ってきていたのです。荷物が増えるのを我慢して持ってきておいて良かったと心から思いました。「Calligraphy ならできますよ。」と大学の先生に伝えると，先生は満面の笑みを浮かべて，「Calligraphy! それは有り難い。是非それでいきましょう」と話はすんなりと決まったのです。

学生の頃，書道部に所属したり，芸術の授業で選択した経験なども全くなかった私ですが，ここは腹を括って堂々と書道を披露しました。姿勢と呼吸を整えて，“This is ‘love’.” とか，“This is ‘cherry blossoms’.” とか言いながら，「愛」とか「桜」などの漢字を次々と筆で書いていくのです。自分では相変わらず下手くそな字だな，などと感じながら一枚一枚半紙に筆を落とします。すると，しーんとして私を見ていた子どもたちの雰囲気が次第に変

化し始めたのです。「オー，クール！」などという言葉が漏れ聞こえてきます。子どもたちの表情をみると、その眼差しには私に対する畏敬・尊敬の念まで浮かんでいるようです。私はその後，子どもたちそれぞれに名前を聞き，それをカタカナ表記にして教え，それを筆で自ら書かせました。自分で書いた文字を見て，子どもたちは大盛り上がりで大満足です。この授業後，私が歩くところには子どもたちの行列ができ，なんとサインをねだられるということまで起きたのです。子どもたちのノートやカバン，腕などにまでサインペンで自分の名前を書かされながら，素人である私の書道も，異文化の壁を越えると，日本人が書いているというだけで人を感動させることができるのだと心の底から感じました。もし、書道部の皆さんが、書道パフォーマンスをしようものなら、きっと英雄扱いされることでしょう。日本人として，日本を代表するような文化・芸術・武道ができることがいかに大切かをこの時痛感したのです。同時に，もっと真剣に自国の文化・芸術・武道に若い頃から取り組んでおけばよかったと後悔もしたわけです。

「〇〇道（どう)」のように、「道」の字がつくものには、茶道・華道・書道などの文化・芸術、剣道・柔道・弓道・空手道・合気道などの武道がありますね。これらのものに共通する「道」という言葉には、「終わりなき精神の修行」という意味が込められており、技術の習得にとどまらず、礼儀作法を重んじ、心を磨き、最終的には自身の生き方そのものを高めていくという、日本独特の美意識と精神文化が反映されているといいます。このことに外国の方は引きつけられるのかもしれません。そしてこれが世界の中の「日本人らしさ」の一つとして認識されているのかもしれない。

それでは、ちょっと範囲を狭くして、日本の中の「鹿児島人らしさ」とはどんなものだと思いますか。皆さんならどう答えますか。答えられないとしたら、自分たちのことを何もわかっていないということになりますよ。これは主観的なものでいいと思いますから、一つの明確な答えはなくてもいいと思います。

大学卒業まで東京で暮らしていた私からすると、幕末から明治維新の頃のことを歴史小説（例えば私の大学生時代に大河ドラマにもなった司馬遼太郎の『翔ぶが如く』）などを読むと、近代日本の礎（いしずえ）を築いた西郷さんや大久保さんをはじめとする薩摩の偉人たちや、それを支えた庶民たちはキラキラと輝いて見えるのです。「泣こかい、翔ぼかい、泣こよかひっ翔べ」とか言いながら、薩摩の先人たちは激動の時代を颯爽と駆け抜けていった。江戸の人

間からみて薩摩の人間は、あまり理屈っぽくなく、多くを語らないがキビキビとテキパキと体を動かし、仕事をこなしていく様が爽快だというようなことも書いてあったと思いますが、そういう先人たちの血を、今の鹿児島人も引き継いでいるはず、と私は思いたい。これが私の「鹿児島人らしさ」を問われたときの答えです。

では、もっと範囲を狭めて、鹿児島の中の「川内人らしさ」とは何か。この地域に生まれ育ったり、生まれ育ってなくても本校入学とともにこの地域に関係ができた皆さんは、この問いにどう答えますか。本校を卒業するまでに明確に答えられるようにしておくことが、私からの皆さんへの課題です。「川内だからできること、川内でしかできないこと」これにこだわって、学習・部活動・探究活動・その他校外での活動に取り組んでほしいのです。

そのためには、この地域の歴史・文化・自然・環境・産業・経済・行政・暮らしなど、あらゆるものにアンテナを張り興味を持っておかなければならない。その中から最も興味のあるものを深掘りして自分の身につけ、これが「川内人である私らしさです」と言えるようになれば、皆さんのアイデンティティーの完成です。ここまで来れば、総合型であろうが学校推薦型であろうが、志望理由書や自己推薦文で日本中であなたにしかできない自己アピールができるのです。

私は高校教師として、鹿児島市内、南薩、３つの離島を経験し、初めて北薩地域の川内に来ました。これまでの地域とは全く異なる自然や気候、歴史や文化、産業構造やインフラなどを感じています。これらのものが、皆さんをどのように特徴付けていくのか。それは、皆さんの方から主体的にこれらのものに関わらなければ起こりえないことなのです。受け身の姿勢ではどこに住んでいてもただの人になってしまいます。ここで高校生活を送る意味を改めて考え、行動に移してほしいと思います。

私は、健康維持をかねて他の地域にいるときから趣味のウォーキングはしていたのですが、そのウォーキングコースに神社を入れたのは川内が初めてです。新田神社の石段を登って降りるだけでも、私にとってはかなりの運動量で、気合いを入れてから登り始めなければならないのですが、神社本殿の裏にある、天皇様のご先祖にあたるニニギノミコト様のお墓である「可愛山稜（えのみささぎ・えのさんりょう）」とともに、毎回川内高校生徒の皆さんの学業・部活動・その他諸活動における目標達成をお祈りするのも、私にとっ

ては「川内だからできること、川内でしかできないこと」と捉えて継続しています。

「そんなことして何か意味あるの？」と言う人もいるかもしれません。そういう人には次のように答えるしかない。「はたから見ている人にとって、意味があるかどうかは分かりません。でも少なくとも私にとっては、生徒がいい結果を出せば、『神様、見守っていてくださり、ありがとうございました』と思えるし、生徒がうまくいかなかった場合は、『神様、まだまだ努力や工夫が足りなかったようです。また頑張らせます』と次の一歩を考えることができる。自分の行動の意味なんて自分で決めればいいのです。

以上のことが、川内に住んで間もない新米の「川内人である私らしさ」です。皆さんそれぞれの「川内人である私らしさ」がどんなものなのか、皆さんが話せるようになることを期待しています。いつでも校長室に話しに来てください。

以上で今日の話を終わります。